

現代南部中国の葬祭用具

東京学芸大学 蔡 文高

死者儀礼にはさまざまな葬具と祭具が用いられる。今までの考古発掘の出土品に数多くの副葬品と看做される土器や骨器、石器などがあることからみて、その歴史は先史時代に遡れる。周時代の人生儀礼をはじめ、さまざまな祭祀儀礼を記録・解説した「三『礼』」(『礼記』、『儀礼』、『周礼』のこと、孔子が編集したとされる)には、死者儀礼に関する記述があるが、そのなかに段階的儀礼の一つとして「陳明器」というものがある。明器とは、冥器とも言い、副葬品を含む葬祭用具のことである。それを陳列し確認することが一つの儀礼とされている。これを見ると、少なくとも周の時代には、葬祭用具を用意し陳列することは、死者儀礼の一環として制度化されていたことがわかる。この「三『礼』」は儒教の経典でもあり、そのなかの死者儀礼や婚姻儀礼の行ない方はテキストとなり、後世に多大な影響を与えた。その「陳明器」も、進行のしかたや明器そのものには時代に応じた変化もみられるが、死者儀礼において重要な意味を持つ儀礼として伝承されてきた。

本研究は、福建・広東を中心に、現代南部中国の死者儀礼に使用される葬祭用具を調査し分析するものである。筆者は以前からこのあたりの、洗骨改葬儀礼を中心とする祖先祭祀システム諸儀礼の調査・研究をしてきたが、今までは儀礼ばかりに注目して、モノには関心を払わなかった。今回はモノすなわち葬祭用具に焦点を当てて、葬祭用具の使用に現れる人々の死生観や他界観などの諸観念を考えてみたい。

葬祭用具とは、葬具と祭具の総称である。現代南部中国各地の死者儀礼に用いられる葬祭用具も語源のとおり、遺体を納める棺や骨甕を主とする葬具と紙銭や紙製「家屋」をはじめとする死者供養用の祭具に大別できる。これらの用具の使用は、単なる「道具」を使うというのではなく、使用する人々のさまざまな考えや価値観が含まれている。例えば、棺の場合、福建省西部では、親の還暦祝いをしてから子供が棺を用意しておくことは親への孝行とされる。また、棺は死者の年齢によって形態や色の異なるものが使用される。幼い子供の死者は古い莫蔭などで包んで簡素に埋葬され、少年の死者には薄い板で造った箱を使用する。いっぽう、成年死者には一応ちゃんとした棺を用いるが、それでも年齢によって使うものが異なる。還暦になる前の死者には原色の棺を用い、還暦以上の死者には黒漆で塗った「福」や「寿」などの文字や絵入りの棺を使用する。さらに、百歳前後の死者には赤い漆で塗り、きれいに装飾した棺が用いられる。これは単に手間を省けたということではなく、漢族の人々の死生観(理想の死、大往生)に深く関わっている。また、紙銭や紙製の家屋・生産生活道具などの祭具の使用は、人々の他界観に結びついている。

以上は、以前の儀礼調査で得た断片的資料と今回(2010年3月)の予備調査で得た資料による感想である。これからは、南部中国における葬祭用具の製造、流通、使用の実態や時代の変化に応じた葬祭用具の変容などに関して、緻密な調査を実施し分析していく予定である。